
a vision in the mirror

葉音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

a vision in the mirror

【Nコード】

N6572T

【作者名】

葉音

【あらすじ】

1998年8月、奇怪な連続殺人事件が芹沢町を騒がす。遊び心と憎しみによつて犯された死体。“犯人は人か、それとも…”。ごく普通に「日常」を暮らす女子高生、橘朱音は事件を取り巻く異端者達の「非日常」へと巻き込まれていく。彼女の不思議な日常生活の全ての始まりが、ここから始まる。

プロローグ（前書き）

この物語はフィクションです。
実在する人物、団体などとは一切関係はございません。

プロローグ

夏の終わりが近付いて、やや冷たい風が肌を滑る。昨夜から降り続いていた雨が止み、今日は過ごしやすい朝になる予感がする。だけど、今の私にはそう思えない。街は一時的に麻酔をかけられたかのような、奇妙な静寂を纏っていた。

そんな静かな夜の街を、私はクラスメートの藍と一緒に歩いていた。

陽が堕ちた後も人が絶えない繁華街でさえ、真夜中となれば死んだように眠っている。不気味に感じるその静けさに、私達の足音が異様によく響く。

いつも賑やかなイルミネーションに包まれる街が、こつこつ異様な雰囲気に満ちるものなのか。腕時計を確かめる。午前2時。こんな真夜中に女子高生2人が街を出歩いているのだから、補導されてもおかしくない。寧ろされるべきなのだろう。私は怯えている。しかし、その怯えはそんな物に対する恐怖感のせいではなかった。そんな私と違い藍は堂々と歩いているように見える。

淡々と歩き続けると段々車と人の通りが少なくなっていく。気が付けばそこは巨大なビルの立ち並ぶオフィス街だ。普段でさえ人気が少ないが、夜の歪な空間が一層沈黙を奏でている。月光が窓に反射して、ギリギリな明るさを醸し出していた。

「…怖いのか？」

隣を歩く少女が呟く。本心は怖いどころではない。すぐ逃げ出したいほどさつきから心臓がバクバクと脈を打っているのだ。なのに、私は変なところで強がってしまう癖がある。

「大丈夫だよ…私、悪運は強いから」

我ながら頼りない返事をする。心配をかけまいと言ったつもりが、

声が微かに震えてしまっていた。藍は目線を進行方向から逸らさず、
そう…、と呟いた。

ひゅーう……。

涼しい風が通る音が、した。

「えっ……？」

思わず私は息を呑む。

背後に気配を感じた…。

冷たい、何かを切り裂くような威圧感。

藍は無表情のまま、何も言わない。だけど彼女もきつと気付いて
いる。

「ね……ねえ……藍」

声が完全に震えていた。張り詰めた空気のせいで胸が苦しい。

「…振り向かないで。このまま誘き寄せろ」

冷たい素っ気無い口調で少女は答え、歩き続ける。私は何とか恐
怖と戦いながら藍の傍を離れまいと必死になった。震えて動かなく
なりそうな足を、無理やり動かしながら。

私は自分が今、街を騒がせている通り魔に狙われているのかもし
れないと考えただけで、背筋が凍った。

プロローグ（後書き）

プロローグを読んでいただきありがとうございます。

初連載という形で思い描いた世界観を出してみました。

文才がなく、拙い文章ですが頑張って書いていこうと思っています。作者はとてもしげやりで気分屋なので、投稿スピードは遅いのですが何とぞ最後までお付き合い願えたらと思います。

・ i (前書き)

この物語はフィクションです。
実在する人物、団体などとは一切関係はございません。

空が綺麗な橙に染まる。日没の時間は日に日に遅くなり、外は明るさを長く保つようになつた。

真夏日が続き、ラフな格好をした人達で駅前は溢れ返っている。そんな人混みの中一人、黒をベースにした制服の女子高生の姿があった。

私こと橘朱音は今、学校の夏期講習の帰り道の最中だ。勉強道具を詰めたカバンを肩にかけ、時折吹く強い風に耐えながら歩いていた。

8月の中旬。高校生ともなると勉強の忙しさに縛られているのが実感する。無理やりにも自分に勉強させようと申し込んだ講習だったが、始めの勢いだけで中盤からダラダラとしてしまった。そしてそのまま今日で講習は終了。それを後悔しつつも夏休みを有意義に過ごしたい私は、幾分か我俣を頭に思い浮かべているのだった。

「んあ〜」

恥ずかしいほど間抜けな声を上げながら、腕を空に上げて背筋を伸ばす。周りの視線はお構い無しでグツと身体を上につ張り、脱力した。

駅に大分近付き、赤信号で立ち止まる。少し小腹がすいた私は、行き付けの喫茶店に寄るか迷っていた。騒がしい街中で自分が休める場所はそこしかない。

ふと、思考を停止させる。その考えはとても馬鹿げていた。今はそんなことができる状態ではない。素直に家に帰った方が良いという思考に、すぐさま切り替えた。夜の芹沢町は恐怖に取り巻かれている。当然、私の日常もそれにドップリと浸かっている状態だ。

横に聳え立つビルを見上げる。壁に取り付けられた巨大なモニタ

ーでは、ニュースキャスターが淡々と原稿を読み上げる様子が映っていた。

「……昨夜、……市内の芹沢町で、男女3人の遺体が発見されました……。」

私はその無感情な言葉の内容に衝撃を受けた。ざわざわ、と周囲の人達も騒ぎ出していった。モニターを凝視しながら様々な人の呟きが聞こえる。

連続通り魔猟奇殺人事件。無差別に夜道を歩く人が襲われ、その後無残な姿で発見されていた。無残な姿とは言うまでも無く、身体をバラバラにされるのだ。それは段々とエスカレートし、現場は酷い有様らしい。5日前から始まったこの事件の被害者は今日で7人になるのだろう。

警察は果敢に捜査を続けている。だが証拠、目撃者は未だにゼロで捜査は難航していた。バラバラにされた箇所は滅茶苦茶に潰されているか、或いは奇麗と思えるほど鮮やかに切り裂かれていたなど一定ではなく、複数の犯行だと見られてはいる。食い散らかされた様な跡が残っていたり（鴉、または犬によってと考えられているが痕跡は未発見）、まるで血を吸われて干からびたような身体になっている死体もあつたりと悲惨かつ理解に苦しむ現状だ。あまりにもそれ自体が原型を留めていないので身元も判明していない者もいる。とにかく分かる事が少なく、尚且つ謎の多い情報が残され一向に進展は見られていない。

この事件以来、夜になると街を歩く人は次第に少なくなった。この駅前も太陽が沈めば、一気に静かな場所に様変わりするのだろう。

気が付くと信号は青で点滅していた。慌てて走り、横断歩道を渡

る。

そうして駅前から5分ほど歩くと、小さな住宅街に入り込む。その中を進めば、少し目立つぐらいの大きさで存在するマンションが見える。それが、私の一人暮らしする場所だ。

「おつかえり〜！」

玄関の鍵が開いているのでおかしいと思ったら、案の定予想通りだった。廊下を抜けて部屋に着くと、見慣れた顔の少女がベッドの上でくつろいでいる。

「蒼花……帰ってくるのは明日って言ってなかった……？」

少女は頬を膨らませて笑った。

「えへへ、ちよつとね。東京も久々に行くとなると楽しみなもんだから予定を繰り上げて早めに来たんですよ！」

唐突に向けられたブイサイン。とてつもなく、反応に困る…。

「だったら連絡ぐらいしてよね。私だっていつでも良いってわけじゃないんだから。そもそも鍵かけてたのにどうやって……」

講習の疲れのせいもあって、変わらない身勝手なその行為に思わず腹が立った。そんな私のうんざりした顔に、彼女は気付いたようだ。

「ごめんごめん。勝手に入ったのは謝るから、この通り！お詫びに今日は私が夕ご飯作るからさ」

ベッドから起き上がり、笑顔で言う。彼女は私の横を過ぎ去り台所へ向かうと冷蔵庫を開いた。中には今日、私が出掛けるまで無かった野菜、肉など材料がぎっしりと詰まっていた。しばらくは二人での生活となるので、彼女が買ってきてくれたのだらう。時計を見

れば時刻はもうすぐ7時になる。お腹も空いていたので丁度良い時間だ。

「なら、許す。美味しいのお願いね」

「はいはい、任せて」

そう言いながら彼女は取り出した肉をまな板の上に置き、包丁で繊細に切り刻み始めた。

私の部屋に不法侵入した少女の名は泉蒼花という。昔からの幼馴染みで、私の中で最も長い付き合いになる友人だ。

背は150センチほどだろうか。小柄で見た目はとても大人しそうなんだけど、スキンシップが激しく滅茶苦茶に騒がしかったりするので“人は見かけによらず”という言葉そのものが生きた姿だと思う。可愛らしい顔立ちで、ポニーテールの黒い髪が似合う。学校では学級委員もやったりと、かなり活発で人気もあった。

しかしどういわけか彼女はある日突然学校を中退してしまった。そして今は全国を巡るように各地を転々とし時折東京へ帰ってくる。何をしているのかを問い質しても答えてくれず、私含めクラスメイト達は真相に近付けないままだ。ただ、一体どんな生活をしているのかは分からずとも、蒼花なら心配することはない。彼女は昔からずっと変わらない、信用される優しさを持っているからだ。

食事が終わり、何もすることのない時間が訪れた。私の部屋は殺風景で、生活に必要な物以外は置いていない。よって娯楽に飢えた場合はテレビを付けるしかない。私達は適当にチャンネルを回しながら、スイカに齧り付いていた。

「朱音、何か面白いことないの？」

騒ぐバラエティ番組をしれっとした目で見ながら、蒼花は呟いた。

「特に無いか。蒼花が何処か旅立ってからも、何も変わらないよ」

「ん、つまらない。……あっ！そうだ、怜君とはどうなったの？」

私は思わずスイカの種を蒼花の顔にぶちまけそうになった。

「なっ……ど、どういうことそれ！？」

「あははは！いやー、親友の恋となると応援したくなるものでしょ

ーよ！で、ぶっちゃけどうなの！」

蒼花にいきなり飛びつかれ、私は混乱した。いや、これはもう毎

度のことなのだけどその話題になると頭がパンクしてしまって冷静

になれないのだ。

「なっ…何も無いって！わ…私は…別に何も」

蒼花は私に押し掛かったまま、いきなり身体を擦り始めたりする。

私は軽く悲鳴を上げながら、それに抵抗して何とか蒼花を突き放す。

「あはは！朱音可愛いなあ。本当にいつも通りで安心したわ」

彼女はとても楽しそうな笑顔で言った。親友との再会とスキンシ

ップ（？）、こんなハチャメチャにこの部屋が荒らされたのも久し

ぶりだ。だから、正直とても嬉しかった。

「そういえば、今回はいつまで泊まる予定なの？」

聞き忘れていたことを不意に思い出したので、尋ねてみる。

「ん〜」

彼女はチャンネルを再び回し始める。明確には決めていないのだ

ろうか。

ピッ。

ふと、蒼花はリモコンの操作を止めた。テレビ画面を見ると、それはまたもや連続殺人の話題を取り上げたニュースだった。

「……………」
私達は沈黙する。さっきまでとは違う雰囲気、温度差。何だか肌寒い。

「……………」この事件の犯人が捕まったら
蒼花は言った。

「この事件の犯人が捕まったら、また出て行くかな」

彼女は、かなり凛々しい姿勢で言い放った。表情はいつも通りの笑顔なのだけど、言葉に何か力強いものを感じた気がしたのだ。私の脳裏にはすぐさま疑問が浮かんでいた。この事件が終わったら？何故そんな曖昧で謎めいた言い回しをしたのだろう。何か深い意味でもあるのだろうか。

「喉渴いたから麦茶もらうね。朱音も飲むでしょ？」

「あつ、うん」

蒼花は立ち上がり台所へと向かった。冷蔵庫から麦茶を取り出すと、二人分のコップに注ぎ込んでいく。しばらくして蒼花が運んできた麦茶を飲むと、ニュース画面はいつのまにか切り替わり、明るいCMが流れていた。

「あの連続殺人と蒼花の仕事……………もしかして何か関係あるの？」

咄嗟に私はとんでもない質問をしていた。意味深げな言葉の意味が知りたく、つい。

すると彼女は満面の笑みを見せる。そして突然人差し指を突き出して、私の頬に触った。

「そんなわけないじゃん！適当に言ってみただけだし！仕事の連絡が来るまでよく分からないからさ、まあしばらくはここにいさせて

もらつと思つ。家事も手伝つからさ！」

私はそりゃそうだよ、と納得してしまった。

この時、もしこれが嘘だと気付いていたら、何かが変わっていてもたかもしれない。

無意味に飛びついて来るのを予想して、私は身体をそらすと蒼花はベッドにダイブした。全く、平和な時間だ。時計を見るともうすぐ9時になろうところ、光が灯るとは裏腹に人の気配は消え街は静まる。

私は明日、軽い用事があったので夜更かしせずに寝る準備をする。蒼花も気を遣ってくれて、10時頃には二人とも布団に潜り込んでいた。

今宵も殺人鬼は街を徘徊しているのだろうか。そんな思考に縛られながら。

濁るような空、こんな今にも雨が降りそうな夜に。

私は静かに眠りに落ちていった。

・2 (前書き)

この物語はフィクションです。

実在する人物、団体などとは一切関係はございません。

朧気な意識で目覚めた。やけに鴉の鳴き声が五月蠅い。

こんな汚い路地裏で、いつの間にか寝てしまったようだ。身体を起こし、周囲を見渡す。自分は夜になると意識がぶっ飛んでしまっているのかもしれない、と我ながら呆れた。辺りは血の海だった。気だるい身体を伸ばして、自分の服が汚れてないかどうか確認する。鴉が喚く方に歩み寄ると、黒い影達が逃げていく。

見るのも悲惨な、何かがそこにあった。でもこれは深夜に自分がやったことだ。受け入れよう。そう思った時、今日は用事があることを思い出した。

時計を確認すると、もうすぐ6時といったところか。まだ街は薄暗く、深夜のまま時間が止まっているみたいだった。

顔を洗って、居間のテーブルに目をやるとメモ用紙が置いてあった。何か書いてある。

「ちよつと出掛けてくるね」

内容はそれだけ。確かに蒼花の字だった。夜中にでも出掛けて行ったのだろうか？こんな物騒な時期に。それに昨日の言葉。：何だろつ。

自分でもよく分からないくらい、胸がざわついていた。

朝食を済ました後、私は駅前に向かう。蒼花に合鍵を渡していないのが気がかりだったけど、あの子なら大丈夫だろう。最高気温は38 と天気予報で言っていたが、朝はそれほどの暑さではなかった。空は曇り気味。住宅街を抜けて駅前に出ると人々が行き来していて、急に賑やかになる。

途中で踏み切りに出くわしたので止まり、私は蒼花にメールをしておいた。帰ってくる時連絡してね。朝食は置いといたから。文字を打ち込む。私にとっては6時とも言えども早朝のため、かなり眠い。メールするのも時間がかった。

「…朱音」

突然、呼ばれたような気がして振り返る。

「あっ…藍!？」

私の背後に小柄な少女が立っていた。制服のような、几帳面な黒と白で彩られたワンピース。同じような黒色のスカート。高峰藍、私のクラスメートだ。

「…久しぶりね」

丁度背後を電車が通り抜け、大きな風が彼女の長い黒髪を靡かせた。

まさか藍に会うとは思っていなかったので私は思ったより緊張していた。なぜならこの子は謎めいていて正直よく分からないのだ。学校でも大人しく、あまり人と話す姿を見たことがない。私も何か

しら学校の行事で用があつたりした時でしか会話をしたことが無いのだ。まあ、同じクラスだから話しかけてきても不自然ではない。「お互い夏休み中に、こんな朝早くから出会うなんて想像しなかつたよ」

「…そうね」

「元気だった？」

「…ええ」

会話が…続く自信が無い。彼女は少し下を向いて、本を読むような姿勢で座っている。ついでに目も据わっていて、話を聞いているか聞いてないかも分からない。

「えーっと………そういえば、昨日蒼花が帰ってきてさ！藍に会いたがつてたよ」

「…そう」

私にはとても厳しい。自分のトーク力の無さを恨んだ。

しばらく歩き、隣町の近くまでやってきた。

「藍はどっちに行くの？」

「…あっち」

私が行く真逆の方向を言った瞬間、妙に開放感を感じた。いやはや、短時間とはいえ沈黙は辛かったのでこれくらいは許して欲しい。親友と言えども無口な子は本当苦手だと常々思う。

「そう、私はこっちだから。というか、こんな所で藍は何か用事でもあるの？」

そういえばお互いこんな時間に出歩いている目的を言っていないかった。変な緊張で、すっかり忘れていたがよく考えると少々気になる。

「…別に、気にしないで」

素っ気無い答えだった。まあ、少しは予想していたのでショックは大きくないけども。

「…それよりも」

「…蒼花と話したいことがあるんだけど。だからいつ会えるかだけ、聞いておいてくれない？」

「えっ…？あ…うん、分かった…」

ちよつと話題が想定外だったので驚いたのもあったけど、蒼花と藍つてどういう繋がりがあるんだろうって思ってしまった。性格はまるで逆な二人だけど、意外と長い付き合いだと思う。学校に蒼花がいた時は、あまりお互い話してる姿を見た気はしないのだが。

「話つてなんの？」

興味本位で尋ねると、圧倒するかのような冷たい目で彼女は私を見る。

「…あなたには関係の無いことだから、首を突っ込まないほうが良い」

そう言つて、彼女は私の横を抜けていった。

「…じゃあね」

振り返ると小柄な少女は人混みの中に紛れ、見えなくなった。

私は公園に向かった。住宅街の中にポツリとある小さな場所だ。

朝の静けさに飲まれながら、道を歩く。風は生温い。少し嫌な空気。少し急な坂を上ると公園が見えた。ベンチに座る人影が見えた。

「ユリノ、おまたせ！」

大きい声で呼ぶと、その子は振り向いた。

「あつ……おはようございます、朱音さん」

彼女は姿ユリノ、という珍しい名前のクラスメートだ。私が最近見ないだけかもしれないが、ツインテールの髪型で背は私と同じくらい。大人しめで穏やかな性格といったところか。姿という苗字は珍しいだけではなく、彼女の家は巨大な屋敷のような場所なので近所でも有名らしい。彼女の家系は昔からそうで、『娑家の人間』として生まれた人間を過保護なまでに扱い、大切な跡継ぎとして育てられる。ユリノはそれが少し嫌で、よく外出をするようだ。

「おはよ！で、早速だけど」

「は……はい……」

ユリノは手さげのベージュ色のバックを漁る。そこから数枚の新聞紙と雑誌が取り出される。私は彼女の隣に座り、それらを受け取った。

「ユリノ、これ全部集めてたの？」

「私の家は沢山新聞を取っていて、最近のは捨てずに積み重なってたんです。良い記事ではないので、少し親の目が怖かったんですけど取って持ってきました。雑誌はたまたま、お父さんが捨てずにいた物ですけど……」

ユリノが渡してくれた新聞と雑誌は、傍から見れば趣味の悪いものだった。そう、あの殺人事件の記事が載った物ばかりなのだ。勿論、これは私がそういう趣味なのではない。というのも夏休みには面倒な論文という宿題があつて、私はそれだけ全く手付かずだったのだ。そこで追い詰められた安直な私は今話題になっているこのユースについて書くこうと思った。……いや、そう思った時点で私も悪趣味なのだろうか。とりあえず、朝の軽い用事というのはこのことだ。

夏休み中はほぼ毎日、彼女は朝から夕方まで稽古があるらしい。

夜はこの通り物騒で危険なので、朝早いこの時間帯に会うしかない。自分も早起きはして悪い事はないので、今日こうして用事を済ませたわけだ。

私はそれらを自分のバックに詰め込む。家でじっくりと見るとしよう。蒼花に変な反応をされそうだけど。

「いや、充分だよ！朝早くからありがとうね」

「いえ、この時間はいつも起きて散歩している時間ですから平気でした」

私達は立ち上がり、公園を出た。時刻は7時を回ろうとしている。薄暗かった空に目が慣れたところに、少しずつ陽射しが射し始めた。

「稽古は何時から？」

「えつと……あつ、今日は早めに帰らないと……。すみません」

「そつか、なら仕方ないね。本当ありがと！じゃあ、またね！」

私は手を振りながら来た道を戻る。ユリノも小さく手を振って、私達は別れた。

「さて……」

素直に家に帰るかそれとも、どこかふらつこうか迷う。とりあえず駅前まで戻ることにした。

こんな残酷なテーマで論文を書くなんて、周りから気味悪がられそうだとは思ってる。でも、もう後戻りできないのだ。

凄まじい冷たい視線がクラスから向けられるのが安易に想像できってしまう。…別に、と気持ちを紛らわせる。どうせ高校生活が終われば、皆離れ離れで終わる。一々周りの反応なんてどうでもいいなと吹っ切れてみる。

私は駅前の喫茶店に入り、一人テーブルに座った。紅茶を頼むとバックの中の紙類を取り出す。結局はネットと同じ情報かもしれないけど、とりあえず雑誌を読むことにする。あきらかなオカルト雑誌のような物を3冊ほど貰ったわけだが、どれもあの事件について

は嘘まみれの推論で書かれていた。本当に幼稚な発想で、都市伝説やUMAなどを扱う感覚で事件が語られている。こんなのが何かの役に立つとは思えないけど、他人の意見を取り入れないと何も始まらない。淡々と読み進めていく。

「……ん」

私はあるところで、ページをめくる手を止めた。

『異端者の犯行、正体は一人の少女か』

サブタイトルで、そんな文字が書かれていた。特集記事の一部を世論じみた語り口調で2ページに渡り続いている。犯人は一人の少女？そんな推測、どの新聞にもネットにも無かった情報だ。私はそれに喰い付いた。

『犯人は死体で遊んでいる。これは異常な行為だが、ここでは“異端”と呼ばせていただきたい。犯罪という異常な行為の中でも“彼女”は異常、つまり異端な存在だ。今まで世間を騒がせてきた殺人事件でもここまで理性の飛んだ殺人は無いだろう。これは理性が壊れたのではなくて、ある意味違うベクトルへと目覚めたとも言える。』

異端、という言葉に私は何故か惹き付けられた。

昔この言葉を誰かの口から聞いたような……………。

思考が停止する。ダメだ、思い出せない。長々と続くこの事件の異端さの説明は途中で終わり、先ほどまで言われていた“彼女”についての話が始まる。

『私は犯人を一人ではないかと仮定する。目撃者、痕跡も見つからない今ではこれは妄想といわれても仕方ないだろう。確かに具体的

な根拠は無い。私が嘘をこれから語ると思ってくれても構わない。さて、あくまで複数での犯行と見られるのはその殺害現場の悲惨さからだ。もしこれが一人によるものなら、犯人は“人間”ではない理性と力を持つているだろう。世間的にはこんな意見が認められるわけがないのだが。ただ、複数の人数に夜道を襲われれば真夜中とはいえ怪しい人影を目撃する人がいるはずだ。今はこの事件を恐れ、夜を出歩く人は少なくなったが事件当初は駅前の近くにはまだ人や車の通る様があった。だが目撃者はいない。となると、犯行が複数人が一人か、どの可能性も実は天秤にかければ同じ程度の可能性と考えるもいと私は思う。世間で完全に一人が否定されてるのは、つまり犯人が“人間”ではないと困るからだろう。」

「私が犯人を“彼女”と呼んでいるのには特に理由は無い。性別は判明しないが、少なくとも一人での犯行だと仮定して、単数形で言わせてもらっているだけだ。」

気付くと頼んだ紅茶がテーブルに置かれていた。どうやら夢中になっっていたらしい。私はこの文章を読み終わると、ふう、と一息つく。一見馬鹿らしい文章だ。こういう雑誌は作り話が多いし、垢抜けた推論もありはしない。私でも書けそうな文章だとも思えてくるけれど、不思議と世間離れたこの考えが意外にも自分の中でしっくりと来た。多分、今まで散々同じニュースを聞いてきたから、世間一般論に飽きてしまったからだろう。少し新鮮な感覚だった。

紅茶を飲みながら、この文章を書いた人の名前を探す。だが、具体的な人名はどこにも見当たらなかった。

「まあ、いつか……」

そのまま冷めてしまった紅茶を飲んで、店を出ることにした。

ユリノの家族は一体どんな趣味してるんだろうと雑誌を見ながら思ったのは否めないが、情報をもらえたのは有り難い。と言っても、流石にこんな馬鹿げた話を論文に取り入れるわけにもいかない。夏の宿題はこれだけだし、しばらく家に引きこもる感じになるのかもしれない。

「あー、何て女子高生っぽくない毎日なんだろ……」
そう思いながら、人波の中に紛れていく。

私はこうして少しずつ日常ではない、非日常に入り込んでいることに。

自分では全く気付かなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6572t/>

a vision in the mirror

2011年9月15日03時26分発行